

句集

夏木立

有松
せいじ

序

親愛なる有松せいじさんが初句集をまとめられることとなった。

せいじさんとの出会いは二〇一〇年五月、奈良での吟行句会に奥様のひろみさんを伴って初参加された。定年後の趣味として俳句を学びたいというのが入会の理由であったが、私が同じ教団のクリスチャンであることを知った奥様が求道中のご主人の後押しをして欲しいと願って、こっそりと協力を託されたのである。

聖夜劇をかしヨセフのひげ落つる

福音に生くる余生や去年今年

もともと真面目なせいじさんは俳句の学びも信仰も素直に受け入れられて、眼から鱗が落

ちるように日に日に開眼されその上達ぶりには目を見張るものがあつた。やがて無事洗礼をうけられてからは奥様と一緒にこられなくなったが、彼女は教会の奉仕が忙しいので…と優しくフォローされるせいじさんであつた。

鈍色の空にぽつんと木守柿

北国のチャペルに遅き春惜しむ

上達ぶりを示すこれらの作品は、俳句を始めるまでは何も感じなかつた世界が、対象物に深く心を通わせることで授かつた感動であることを証している。「究極は信仰である」高浜虚子のこの言葉の意味は深くどの様に解するかは諸説あるが、信仰を養うことによつて見えないものが見えるようになる…そんな意味も含まれているのではないかと私は思う。

夏木立グリーンチャペルはログハウス

下草に日の斑の遊ぶ夏木立

句集名には『夏木立』を選んだ。天へ直立するその姿には逞しい雰囲気があり、何事にも真っ直ぐに真摯に取り組まれるせいじさんの姿そのものだと思ったからです。女性の多い『ゴスペル俳句会』において頼りになるその存在は不可欠なのである。

厨房に立ちて汗だく妻の留守

酒粕は妻へのみやげ新酒利く

最後にもう一度奥様の存在について触れておきたい。仕事の関係で何かと葛藤のあったご主人の救霊のために奥様はずっと祈ってこられた。賢い妻は夫の冠…：すぎるような気持ちで

句会にも参加されていたひろみさんの熱い思いを決して忘れてほしくないのである。

句集の序を借りて場違いなことを書いたことをお赦し願いたい。せいじさんの俳句が神様を賛美する詩として用いられますように、また奥様と共に歩まれる信仰生活の上に神様の豊かな祝福があるようにと祈って序のことばとしたい。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

鐘の音の余韻
嫋々青葉山

外車へと消ゆ
高僧の輕羅かな

足弱の母
エスコート
薰風裡

緑さす聖書日課の窓辺かな

雲散らすごと中腹の山桜

花人と声掛け合ふも見ず知らず

山門をくぐる我らに芽木の風

眼福と見し満開の丘の梅

御点前の所作のごと掬む春の水

春光に反る白銀は大架橋

堂ぬくし碧眼の徒も写経せる

寄す波の砂嘴に消えゆく春日かな

盆梅の幹のねぢれは勘亭流

裸木にひつかかりたる雲真白

農道の深き轍に草萌ゆる

引越しの置土産なる雪だるま

ベランダの手摺に小さき雪だるま

竹林を流離ふ焚火煙かな

新春の駅頭にはや献血車

凍雲を切り裂くごとく落暉さす

四つ目垣真つ新にして年用意

最高峰とて寒風の巖に佇つ

竹と竹あひ撃つ音や北風

白線の見えぬ落葉の駐車場

吃水の跡みせて川涸れにけり

どの畝も大根の肩せり上がる

鈍色の空にぽつんと木守柿

残る虫砲台跡の草葎

蓑虫の梢は剪らず庭手入れ

水澄みて岩根の見ゆる山湖かな

倒れ伏す稲穂を起こし起こし刈る

見得を切る力まだあり枯蠘螂

電柵が守る寺領の花野かな

スタートの揃はずもよし運動会

魁は雑木隠れの櫛紅葉

びりの子を励ます拍手運動会

数独に時を忘るる敬老日

一溪を覆ひ尽くして真葛原

高牧を縦横無尽つばくらめ

牧さやか若き乙女が牛の世話

参 磴 は 百 日 紅 の 屑 豊

帰省子の靴が占領上がり口

見舞状灼けしポストに投函す

風通る千畳敷の堂涼し

一瞬の黙ありてまた蝉しぐれ

湖上なる鳥居を過るヨツトの帆

朝風に白帆散らばる湖涼し

久闊の友と露天湯夕紅葉

山莊へ誘ふ石露の小徑かな

竹林はいましも虫の音楽会

萩の花しぼるがごとく雨雫

刻の鐘鳴りて噴水一斉に

蝉しぐれ小休止せる亭午かな

のけぞりし姿のままに蝉の殻

雨蛙歩板にたたたら踏みにけり

身じろがぬ托鉢僧へ花吹雪

小旋風に逆巻く道の落花かな

抽んでしペンシルチャペル芽吹山

一つ星抱きてヒ首の月凍つる

新春の号外に街さんざめく

からからと吾を追ひ越す落葉かな

退院の母爽やかに若返る

爽やかに声かけて去る療法士

秋めくや母退院の日を数ふ

病室の窓夕焼けに染まりけり

打水をして艶めきし石畳

山清水ひく蹲踞に漱ぐ

霊峰の樹々直立す青葉闇

側溝の蓋躍らして男梅雨

草引けば右往左往す団子虫

被災地にひろがる花菜明りかな

夏木立グリーンチャペルはログハウス

春を待つ仮設も住めば都とぞ

大木をのぼりつめたる天つ藤

池の鴨一羽もぐれば次々と

見下ろせば冬日に沈む京盆地

谷崎の自筆てふ碑に風花す

頂に一灯点る雪の山

病室の友と祈りし聖夜かな

全容を池に映して紅葉山

母の手を引きて紅葉の嵐山

幼帝を祀るお宮へ七五三

釣り舟のひしめく冬の壇ノ浦

錦繡や花嫁を撮る浮見堂

源流と標立ちたる山清水

溪流に半身浴の西瓜かな

かなかなの楽にまどろむログハウス

夏帽と青春十八きつぷ買ふ

春愁や津波禍の地をまのあたり

苔庭によき翳落とす若楓

バギー車にみどりご
睡る樹下涼し

金色の褪せて枯野の
昏れなんと

キャンドルの火を
頷け合ひてクリスマス

荒鋤きの畝間に光る薄氷

聖樹の灯窓より洩るるケアハウス

錦繡の峡二分けす一瀑布

健脚に遅るるもよし紅葉狩

抽ん出し千年杉や寺紅葉

小春日の堀端に画架並びをり

飛機の影いま名月を過ぎりけり

電線を擲めて宙へ葛の蔓

あきつ群る古墳を望む大池に

丹波路に広がる早稲の穂波かな

早田に亀甲のひび走りけり

北国のチャペルに遅き春惜しむ

春愁やルオーの描きしイエスの顔

間延びせる出船の汽笛春の昼

山頂の巨大風車に風光る

都府楼も霾るなかに沈みけり

冴え冴えとして中天の月円か

耕人の田毎にひとりまたひとり

会堂に満ち充つ春の光かな

雀どちはしやぐや春の潦

自転車のペダル重たし春嵐

霧滲む始発電車のライトかな

自動ドア開きてロビーへ風花す

玉の日を纏ふ冬芽のうぶ毛かな

雲切れて日矢射しをれど片時雨

毀たれしビルの虚空に月冴ゆる

山壁の深きに迷ふ狭霧かな

筑紫野に起伏をなせる紅葉山

凍て空へ火葬の煙直立す

末広の水脈曳き進む番鴨

団栗の散らばつてをる砂場かな

稔り田の朝日に映ゆる湖国かな

絡む日を払ふパンパスグラスの穂

コスモスの風に抗ふ術知らず

豊秋のこのあたりまで寺領らし

厨房に立ちて汗だく妻の留守

礼拝のあと子どもらへかき氷

行く雲に秋嶺しざるごときかな

録音に紛れ込みたる蝉時雨

下草に日の斑の遊ぶ夏木立

マリンバのトレモロの楽いと涼し

耳朶を打つ水琴窟の楽涼し

抜き足のまま田の鷺の身じろがず

雨脚を切り返しをるつばくらめ

宇治川の梅雨の瀬波の荒々し

一散に駆け込む軒やはたた神

懸崖に広がる風の羊齒涼し

溪流に少女の素足まぶしかり

アトリエのフロアに踊る若葉影

田水張る湖水を望む大平野

木洩れ日の斑がパラソルに遊びをり

げんげ田に浮かぶ白亜のチャペルかな

船頭の口八丁や花見舟

幼な子の双手包みに染め卵

愛づるごと松葉を捌く剪定師

菜の花の黄に埋もれたる中州かな

春風に乗せて船頭唄ひけり

しんがりの貨物列車に残る雪

墨書なる大表札や雛の家

堵列せる出土の埴輪あたたかし

雪しまく旅の一夜もまた一会

凍空に投げ入れしごとヒ首の月

日向ぼこ兼ねて漁網を繕へる

初霜や玻璃戸に残る子の手形

青き肩風にさらして大根畑

駅伝の実況を聞く初湯殿

福音に生きる余生や去年今年

聖夜劇をかしヨセフのひげ落つる

クリスマスリースパン生地とは見えず

草紅葉地獄谷へと標立つ

分水嶺吹き分けらるる花芒

誰彼となく会釈して花野人

橋脚を潜るがごとく秋日落つ

火矢駈けるごと夕焼の飛行雲

夕映えの蘆原に落つ鳥の影

秋燕や郷関出でて半世紀

半纏を着て余念なき菊師かな

孫からの声の便りに夜の長し

ジ
エ
ツ
ト
機
の
貫
く
秋
の
雲
高
し

さ
な
が
ら
に
カ
ノ
ン
の
調
べ
法
師
蟬

鯉
跳
ぬ
る
音
の
か
そ
け
し
秋
風
裡

ただ無為に池塘もとほる秋思かな

熱々のうどん啜りて暑に耐ふる

船端を叩く波音も秋の声

白壁に影を遊ばせ若楓

ワイパーのあはひ一閃はたた神

険競ふ三兄弟の雲の峰

定例句会入選句

とんぼうの羽を休める歩板かな

一筋の小径が分かつ花野かな

花棟去らんとすれば匂ひけり

ジグザグにのぼる人影梅の丘

境内が迷路となりし年の市

裸木がとり囲みたる池塘かな

冬の蠅イエスの像のみ衣に

霧深しダム湖は隠沼のごとし

どんぐりを踏まねば行けぬ深山道

秋天へ祈るすがたの天使像

四散して斑猫我を惑はしむ

つくばひの水面に立ちし秋の風

出し抜きの雨に四散す蝉つぶて

緑雨いま塵ひとつなき石畳

せせらぎに和して四葩の毬揺るる

木洩れ日と戯るるごと羊齒涼し

佇めば珊瑚礁めく梅の丘

手を堅く組みて祈れば悴まず

尖塔の聖十字架に風花す

対岸の句友と交はす御慶かな

錦繡の山湖を抱擁す

参道を狭しと埋め萩盛る

子らあそぶ土竜叩きの噴水に

真青なる空を掃きゐる若楓

ひな壇のごと展けたる梅の丘

天鷲絨のごとき苔の上落椿

暗き堂出て目潰しの春日燦

磐石に座して動かぬ秋の人

左折れ右折れしては滝落つる

緑苔をまとひし樹々や滝の道

日焼して除染を担ふ男どち

春雨に濡るる宝塔丹のしるき

カラヤンのごと髪乱す春疾風

清流にかがめば谿の秋の声

被災地の墓に小さき鯉のぼり

語部の声のくぐもるおぼろかな

老幹の低きに芽吹く瑞枝かな

轉りの異口同音にふりそそぐ

魁は山茱萸の黄や芽吹山

老幹の瘤隆々と梅つぼむ

白梅といへど灰かに罅紅し

くわりんの実木偶のごとくに個性あり

鹿垣の戸に鍵はなし深山道

エジソンの碑へ直立す今年竹

花屑を吸ひ込む鯉の深呼吸

窯出しの素焼の棚の春埃

くべられてほむら鎮まるどんどかな

片陰にひしめく顔や鉾進む

回
る
た
び
鉾
大
空
を
か
き
回
す

人
波
に
埋
も
れ
て
仰
ぐ
鉾
高
し

満
目
の
森
の
み
ど
り
に
風
渡
る

山つつじ映すダム湖のふかみどり

信号を待てぬ人あり街師走

酒粕は妻へのみやげ新酒利く

竹林の入口はここ彼岸花

大笹を鳥居に結はへ星祭る

盤石を磨き磨きて滝落つる

老鶯の声に一息岨の道

静けさに朝戸を繰れば雪世界

雪山へつづくセコイア並木かな

吟行句会入選句

霊水として一条の瀧涼し

出格子の古町をゆく白日傘

銀輪に初夏の日差しや人力車

鐘
楼
の
鐘
は
泰
然
青
嵐

い
かな
ご
の
船
団
綺
羅
の
波
隠
れ

子
午
線
に
た
つ
十
字
架
や
風
光
る

身に入むや震禍の瑕の残る礎

いにしへのお白州といふ土間寒し

まらうどで混む古町の路地小春

真青なる空うつしたる芋の露

三尺寝して昼糶を待つ漢

岸壁の藤壺洗ふ青葉潮

高速艇夏潮蹴つて速度上ぐ

切り株をベンチとしたる落椿

禁門をくぐれば苔の青畳

妙見山を隠さんと霧立ちのぼる

あめんぼの水面を駈けて上機嫌

木洩れ日の斑に紛らはし半夏生

楼門の四囲悉く若楓

清流へ標立つ道草紅葉

うそ寒し砲弾並ぶ忠魂碑

朽ち折れし男柱や蔵寒し

尻ふつて仲むつまじき番鴨

もみぢ影さす川の淵魚影濃し

せせらぎは癒しの楽や紅葉峡

谷戸暮れてをちこちともる蛍かな

漆黒の川筋たどる蛍狩

万緑の谷戸をつづりてバスの旅

栗の花谷戸の一村埋めけり

大橋も下航く船もおぼろかな

春風に乗りて高鳴る鳶の笛

稔り田の香が通ひ来る古墳かな

骨太の腕もて掬ふ金魚売

滝の上に立ち上がりたる飛行雲

ガス灯の百余年てふ花の道

樹間よりのぞく塔頭照り紅葉

灰暗き障子の奥の玉座かな

宮跡の一投足にばつた跳ぶ

秋思とも伏目がちなる右近像

さしのばす手にみ吉野の姫螢

滝の水一息入れて瀬に向かふ

石垣の乾く間もなし滝社

山の香の満つる川辺や河鹿なく

大噴水尖塔のごと天を突く

山門の雪解霰に首打たる

嬰鑠とせる枯蓮もありにけり

白壁の割れ目と見しは枯蠹螂

黄金の稲田に浮ぶ古刹かな

あとがき

二〇一〇年三月に定年を迎え、余生の趣味として俳句を志しました。

そんな折、不思議なご縁で『ゴスペル俳句』と出会い、入会を申し込んだところ直ぐさま奈良の吟行句会に誘っていただきました。妻と二人で恐る恐るの参加でしたがメンバーの皆さんに温かく迎えられ和やかな雰囲気の中で楽しむことができました。

早いものであつという間に八年が過ぎました。今なお初心者域を出ませんがそれでも少しは進歩しているのではないかと思います。これも吟行による実践的な指導をしていただけた『ゴスペル俳句』のおかげだと心から感謝しています。

このたび古希を迎える節目の記念として句集を纏めることにしました。時系列に並べられ

た作品を辿っていくと、そのときどきの情景がはっきりと脳裏に浮かび、まるで写真のアルバムをみているようでじつに感慨深いものがあります。

みのるさんには作品の再選とともに身に余る序文まで書いていただき心からお礼申し上げます。あまりにも過分な内容に消え入りたいほどですが、これもまた激励のお言葉と受けとり今後の歩みの糧にしたいと思います。本当にありがとうございます。

みのるさんの俳句レッスン記事の中に、次のような理念が記されています。

「知識や理屈で作った俳句は自己満足の言葉遊びに終わりがちですが、自然からの語りかけや感動を写生する『ゴスペル俳句』は祈りであり賛美なのです。∴四季の変化や自然との対話を通して、天地万物の創造者でありわたし達を生かしてくださる神さまがいらっしやることを、ぜひ実感していただきたい。」

このお言葉を心に刻み、初心を忘れずにさらに切磋琢磨して励む所存です。

最後になりましたが、いつも温かく迎えてくださる句仲間の皆さんに心からお礼申し上げます。また背後で祈り支えてくれる妻にも感謝のことばを記しておきたい。

平成三〇年七月吉日

有松 せいじ

『夏木立』 有松せいじ句集

平成三〇年七月三〇日

印刷

平成三〇年七月三〇日

発行